**平成27年度　第1回アートを活かした障がい者の就労支援事業企画部会**

**議事概要**

日　　時：平成27年7月1日（水）13:00～14:40

場　　所：府庁本館 第三委員会室

出席委員：　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（五十音順）

今中　博之 社会福祉法人素王会　理事長

植木　啓子 大阪市経済戦略局文化部文化課（新美術館整備担当）　主任学芸員

川井田祥子 公立大学法人大阪市立大学都市研究プラザ　特任講師

坂本ヒロ子 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会　理事長

高市　純行 毎日新聞社総合事業局文化事業部　部長

殿村　壽敏 社会福祉法人精神障害者社会復帰促進協会　理事長

福島　　治 福島デザイン

藤原　　明 りそな総合研究所　リーナルビジネス部長

その他出席者：

　前田　健次 一般財団法人大阪府地域福祉推進財団（ファイン財団）事務局次長兼総務課長

　宮本　典子 OFFICE N代表

　田中　清佳

**議事１　アートを活かした障がい者の就労支援事業の推進**

資　　料：

資料３　アートを活かした障がい者の就労支援事業の推進方向

　資料４　アートを活かした障がい者の就労支援事業の再構築に係る調査結果概要

　資料５　福祉基金地域福祉振興助成金募集要領（一部抜粋）

　資料６　福祉基金地域福祉振興助成金採択事業概要　現代アートを介した障がい者の自立支援事業

主な意見等：

**福祉基金地域福祉振興助成金採択事業について**

○　ファイン財団が実施する市場参入支援事業について。まず一点、作品の調査研究というのは、入賞者の作家性ないし、その作家の過去の作品を研究するのか。もしくは、入選者以外の作家さんの研究をするのか、調査研究の対象者は誰なのか。

○　ご説明の中で「アール・ブリュット」ということをたくさん言われているが、そもそもこの事業においては、「アール・ブリュット」というカテゴライズはしないで、現代アートとして、彼らの作品を見ていくというのがあるので、アール・ブリュット関係というのは、予備調査としてはいいかもしれないけれども、そういう論点ですすめるのかというのが二点目。

○　最後に、著作権等の研究会、勉強会というのは、そもそもこの助成事業は、今までやれてなかった入選者を市場に結び付けるという、実践的な内容に対するものだと思っていたのだが、そのあたり理解の違いがあるのだろうか。

（ファイン財団回答）

⇒　一点目について、対象としてとりあげるために訪問する作家や施設を絞り込む際に、最初にとりかかりとなるのは、過去の公募展の入選者である。ただ、それに限ったものではなく、そこの施設で公募展に出していない作家でも、取り扱う可能性があると考えている。福祉基金の助成事業の募集要領にも、「入選作品を必ず含むものとする」とあり、事前に事務局に問い合わせた際にも、入選作品に限定したものではないとの回答を受けているので、中心となるのは公募展の入選作品だが、それだけではないという認識でいる。

⇒　二点目については、大阪府の方向性というか、スタンスとして、アール・ブリュットというのではなくて、現代アートとして打ち出そうとしているということは、今のご指摘で改めて認識したところ、そこをぶれてはいけないと思った、活動をするときには常に頭に入れて活動させていただきたい。

* 今の説明である程度は理解できたが、これまでの事業の経過があるので、採択団体としては急に言われても分かりにくいと思うが、大阪府の立場としてはどうなのか。今、おっしゃっているように、公募展の入選者とともに、新たな方々も俎上に載せていくということか。

（事務局回答）

⇒　これまで優れた才能を発掘し、国内外含めて、市場づくり、市場参入をどうしていくのか、ということを進めてきたところであり、そのために公募展をやってきたのだから、そこで入賞された方を対象にと、それは大阪府としてもそういう認識である。ただ、福祉基金地域福祉振興助成金の提案募集を行うにあたっては、今回、初めて募集を行うにあたり、かなり事業目的や内容等をしぼった形で募集をした場合、どういう形で手が挙がってくるか、まったく手が挙がらないときにどうするか等々、いろいろな懸念もあり、募集要領の中では、「必ずこの公募展の入賞作品を支援対象として含んでください」というかたちで、少し幅広にさせていただいたところはある。委員がおっしゃったように、本丸は公募展の入選作品を市場につないでいくというところ。

○　せっかく長い間やってきて、レベルの高い作品が賞を取られているので、その作家に注力して、エネルギーを投入して取り組んだ方がよいのではないか。

○　大阪府の説明も分かるが、公募展において著名な審査員にずっとお願いしているというのは、現代アートの世界でこの人たちに選んでもらったら、それでもう信頼できるということで、お任せしているのではないか。広げて発掘したいという思いも分かるが、選ぶ基準が変わってくることにはならないか。

（事務局回答）

⇒　委員のおっしゃるとおり、何のためにプロに審査してもらっているのかというと、そこで一定の評価がなされているということがあるので、必ず入選作品をコアにして、市場に送り出す作品というのは選んでいただきたいというのはある。一方で、ギャラリーの方と入選作家を引き合わせたときによく言われるのが、入選作品だけを見たいのではないと、その作家のそれ以外の作品もトータルで見たときに、市場に向く作品、向かない作品があるという、そこはやはり美術の評論家の視点と、市場の関係者の視点は、若干違うところがあるのかなとも思うところで、入選した作家が、それを契機にそれ以外の作品が市場の目に留まるということになれば、それは入選の意味は充分あると思うので、そういう意味で作品の研究をされるというところがあるのかなと考えている。

○　そうなると、事業全体として見たときに、福祉基金を活用される市場参入支援の部分と、公募展の部分との、この関係性というものが見えてこないというところではないか。

○　平成20年度からずっと続いてきて、近年、盛んに議論してきたのが、スピード感であるとか、実際の就労支援も発展がみられないというところで、今回、実際的具体的にこういうふうに事業が進んだというのは素晴らしいと思うので、勉強会や調査研究などをやるのではなく、とにかく作家を決めて、がんがん売り込んでいくということに集中した方が結果が出やすいのではないか。次年度は、もしかしたら事業者が変わるかもしれない中で、今年度の事業者の実績というのは、確実に次年度に継がれていくような、目に見える進み方というのをお示しされ、成果として進んでいるぞというのが見える、ということが重要なのではないか。

○　もっと広がりを持つみたいな点はすごく理解はできるが、公募展に作品をもっと集めようと思ったら、いつも言っているようにイチローが出るということが一番裏付けになるというのが、ここでのこれまでの話だったと思う。そのイチローは見つけたが、お金がないので世に問うことができませんでしたというのが、今までだったと。今回、こうしてお金が付いたのであれば、公募展をベースにして、その入賞作品については世界へと送り出す、それが売れたら、公募展の価値が高まって、たくさん作品が集まって、よりそこに送り出す仕組みができて、また集まる。この循環をつくるのが、この事業の目的だったように思うので、そこをばらばらにしてしまうともったいないことになるのではないか。

○　この予算は、アートの世界に作家を売り込んでいく内容においては、非常に小さなお金なので、有効に使わなければ意味がない。今まで公募展で培ってきた入賞作家に限定をして、絞り込んでその数名の方の実際、作品を見せてもらう、知るということが大事なのではないか。

著作権に関してはプロフェッショナルなのだから、その該当される作家の方に著作権の説明をすればそれ以上の必要はないのではないか。大事なのは、国内アートフェアに出展して、それからどう海外につなげていくのか、つなげていくときにはどういうポイントを大切にして活動していけば、最終的に成功するのか、そこがすごく大切だと思う。例え事業期間は１年ごとであっても、２年、３年見越して計画を立てた方がいいし、みんながゴールを共有しながら、そこに向かって知恵を集めていくというふうにするのが大切ではないか。

（ファイン財団回答）

⇒　これまでの経過、当初から市場化を目指していたが、なかなか手つかずだったということを改めてお聞きして、そういったところを考慮し、スピード感が必要なんだということを認識した。しかし、現実に自分たちが事業を進めていく上では、やはり作家のことは知っておかなければいけない、入賞した作品だけではなく、ほかの作品だったり、その背景にあるものだったり、お客さまに説明するときには、そういうことを知らないでは説明できないというのが実際的にあるので、作家の研究というのは外せない。お話を伺って、あらためて感じた点、その視点を入れつつ、メリハリを付けて活動していきたい。

⇒　今日の委員の皆さんの意見交換を経て、「情報発信のプラットフォーム」は絶対必要だと思うが、勉強会はそんなに力を入れる必要はないということが明らかになった。ただ、「作家・作品の調査研究」に関しては、やはり具体的に自分たちが分からないことは紹介できないというのがある。なので、調査研究とアートフェア出展に力を入れ、その媒体となるものとしてプラットフォームがあるというスタンスでやっていきたい。

* 確認だが、入賞作家の中から該当する作家の人を選んで、その作家をより深く理解するということで、それ以上広げないということでよいのか。そこは、採択団体ではなく大阪府のかじ取りの部分と思うが、どういう意向を持っているのか。

⇒　今回は、支援対象には入選作品を含む、というかたちで提案募集を行っているので、公募展の入賞作品を中心にして、その周辺というか入選されていない作家さんも含まれる可能性はあるということにはなる。

⇒　あくまでも採択された団体が主体となってやる取組みに対して福祉基金から助成するという事業で、大阪府の委託事業ではないので、大阪府としては取組みを側面的にご支援するというかたちにはなるが、今後とも協力してやっていくことに変わりはないので、今年度の具体的な取組みについては、本日のご意見、ご提言の趣旨も踏まえながら、今後調整させていただきたい。

○　そもそもなぜ支援対象の範囲を入選作品のみと限定しなかったのかという点について、福祉基金の性格上、限定できなかったみたいなことではないのか。

（事務局回答）

⇒　元々、地域福祉振興助成金というのは、名前のとおり地域福祉の振興のための制度で、ＮＰＯ等の日頃の活動を支援するいわゆる草の根助成というのが基本になっている枠組みの助成金。あくまで地域の福祉に貢献してくださいというベースがある枠組みを活用しているので、極端に絞り込んだ設定が若干難しいというのも、側面としてはあったかと思う。できるだけ幅広く色々な提案が出てくる中で、良い提案を採択できるようにということで、主管課の地域福祉課とも相談し、今回はこのような形で設定をしたところ。来年の募集の際には、審査基準や、募集事業の内容をより限定化するような形で、公募展事業とのリンクがうまくいくような形に検討していきたいと考えている。

○　来年度以降はそれでいいが、今年度の修正はきくのか。

（事務局回答）

⇒　その点については、この場で、どこまでこうやりますというお答えはできないが、本日いただいたご意見は十分理解させていただいた。福祉基金の助成事業を所管する地域福祉課と、私どもこの部会の事務局である自立支援課とが、協力し合って今回の募集事業を行っているので、両課で調整し、ファイン財団さんともお話しさせていただいて、今日のご意見をどこまで反映させていただけるか、調整してまいる。

**議題２　第５回公募展の実施について**

資　　料：

　資料７　第4回公募展の広報成果

　資料８　第5回公募展　開催計画（案）

　資料９　第5回公募展　報道資料提供（案）

　資料１０第5回公募展　募集要領（案）

主な意見等：

○　公募展の開催計画については概ね了承。

〇　審査員について、今後も継続していく中で、また新たな才能を発掘していくという目的からすると、新しい目で審査をしてくれる方を入れることも将来的な課題として想定してもよいのではないか。

* 今年度は、展覧会の会場が江之子島になるということで、空中庭園展望台に比べると展望目的で入っていらっしゃる方もいないし、阿波座という土地柄は、梅田よりもなかなか集客面では黙っていても人が来るというところではないと思うので、広報の仕方は工夫が必要なのではないか。

**議題３　その他**

* 「まち・ひと・しごと創生推進審議会」に委員として参画しており、昨日、第1回審議会が開催されたところ。これはご存じのように、地方創生の大阪の総合戦略をつくるというものであるが、会議の中で、とがった戦略を取るべきであるということや、文化面ということをもっと打ち出してもいいのではないかというような話もあった。まち・ひと・しごと創生総合戦略の中では、就労であったり、機会を増やすみたいなことも言われているし、そういった各部局が取られている施策みたいなものを、たぶん取りまとめるみたいな総合戦略だと思うので、うまくそういう場を使って、このアートを活かした障がい者の就労支援についても打ち出していかないといけないのではないか。

○　自分自身の研究としても、日本全国で、障がい者のアートを取り扱いながら、就労にまでも結び付けているところを訪ね歩いて、そこでの取り組みや、実際にどういったものができたりということを研究している。様々なところに伺って感じるところは、結局、一つだけのプロジェクトで全部を成功させるということはできないということ。この事業でも、公募展で入選された方を、海外だけでなく、国内に向けても活躍される作家さんを生み出していくということでは、その価値をちゃんと社会に理解してもらうこと、そのためにはやはりブランド化が非常に重要。行政のお金だけではなかなか実現が難しいと思うので、例えば、ファッションデザイナー、大阪にも優秀な方はいっぱいいらっしゃるので、そういう方にプロボノとしてご協力してもらって、入選作家の作品とコラボレーションして、作家の柄を使って洋服をつくってもらう、それを百貨店さんでＣＳＲ事業として協力してもらって、発表して、販売してもらう、例えばだが、そういうような、お金ではなくて、それぞれが持つ職能を活かして、新しい価値をつくり、全国、世界に対して発信するという目的であれば、それほど大きな予算はなくても、これは実現可能ではないか。大阪には、たくさん素晴らしい方がいるので、そういうところとうまく協力関係を結んでいくのも一つの方法かな、と考えてほしい。